

言語文化と教育

——英語 dry の多義性を通して——

阿 武 尚 人

要 旨

本稿は、英語の多義語における“dry”の多義性を共時的かつ通時的に捉えることにより、その多義の妥当な意味論解釈を論考し、日本の外国語学習における語彙学習を再考するものである。第一に、語の多義性における認知言語学の導入意義を述べる。第二に、“dry”の多義性における先行研究の問題点を考察する。最後に、理想化認知モデルを基に、その問題点を解決する“dry”の新たな意味論的解釈を行う。

キーワード：認知言語学、多義性、言語文化、外国語学習、理想化認知モデル

1. はじめに

日本における外国語学習者にとって、伝統的な語彙学習指導法とは、通常「日本語訳との併記」をその主な基盤とし、一つひとつの対応関係を無機質に見つめる暗記作業に終始せざるを得ない活動であったことは言を俟たない。確かに、そうした方法論の導入理由には、限られた時間的資源の中で相当量の語彙数を獲得しなければならない初習段階での有用性が関係しているよう。しかしながら、ONE FORM, ONE MEANING (cf. Bolinger (1977)) の知見を挙げるまでもなく、形態と（それが表示する）意味の間にはそれ相応の結びつきが存在しており、語彙概念についても例外ではない。筆者の中等・高等教育課程における指導経験を振り返っても、その派生プロセスへの学習者の関心は習熟度が上がるにつれて高まる傾向があり、特に「一つの形態に複数の意が内包されている語」、いわゆる「多義語」についてはその内容物たる意味間の概念的結びつきにこれまで数多くの質問・疑問が集中してきた¹⁾。確かに、語彙概念の活用は外国語学習における十分条件にはならない。その一方で、学習者の知的好奇心を満たす上での必要条件にはなり得ると考えられる。この点について、以下(1)に示される見解は、外国語学習における語彙指導においてもその意義が問われよう。

(1) 問われる教師の力量

以下は高等教育の充実に向けてのFD (Faculty Development) の課題である。

- (1) 教師の自信と熱意が授業力の源泉である。魅力ある授業、わかりやすい授業は自らの

専門を極める事によって実現する。

—中村 (2004: 18)

以上の状況下、近年、多義を生じさせる派生プロセスに言及しようとする学習参考書も少なからず刊行されている。次の (2) がその一例である。

(2) dry [drai]

乾いている

原：水気を抜いた

イメージ：(水気を抜いた) ⇨乾いている；(水気を抜く) ⇨乾かす，水気を拭き取る

解：dr- には〈引く〉のイメージがあり，〈水が引く⇨乾く，干上がる〉の意味が生じた。

関：drain 水を切る / drought 旱魃

—政村 (2002) (s.v. dry)

上記は、印欧祖語の史的事実も踏まえながら「イメージ」という名の単一の観点から基本語彙の多義性が簡潔に記述されており、学習者の理解を手繰り寄せようとする試み自体は高く評価されるべきものである。しかしながら、(紙面の都合が関係しているのであろうが) たとえば、同一の形態でありながらも下記 (3) で表示されるような dry の意については、以上の導入だけでその派生プロセスの全容を説明するに至り難い。

- (3) Arnie: My beer is Rheingold, the *dry* beer / Think of Rheingold whenever you buy beer / It's not bitter, not sweet, it's a real frosty treat / Won't you buy, won't you buy Rheingold Beer / Won't you try, won't you buy

—映画 *Silver Bullet* (1985) (斜体筆者)

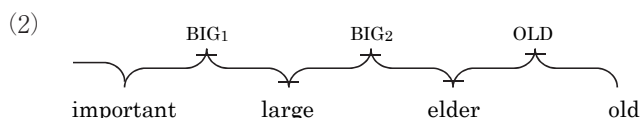
もちろん、学習参考書などにおける語彙学習書は、単一語内におけるすべての意味用法への派生過程を解説すべき対象範囲としているわけではなく、また、簡単な記述の方が初習学習者に適している事実も存在しているに違いない。しかしながら、筆者が知る限り、上記で言えば「辛口の」と訳されることが多い dry は新奇な表現ではなく、少なくとも日常生活で用いられる意味用法には妥当的説明が付与できるだけの概念的見解が求められると考えられる。

そこで、本稿では、日本国の中等教育課程(英語教育課程)で誰もが学ぶ基本語彙“dry”を論題としてとりあげ、単一語における多義性のメカニズムについて我々教壇に立つ者が如何に接していくべきか、その教育的一端を検討することが主目的となる。

2. 言語学研究を交えた教育的視座

多義性への新しい教育的アプローチを模索する中、言語学研究における諸成果の導入はそのメカニズムを説明する上で欠かすことができない。特に、現代では「認知言語学 (Cognitive Linguistics)」の知見がその活用手段の一つになり得る。以下 (1) がその詳細となる。

- (1) 語彙研究そのものに関する言語学の歴史を紐解くと、遥かに長い年月をかけて数多くの研究者がその人生を賭してきた歩みでもある。Jespersen, Curme, Poutsma, Kruisinga 等の伝統文法 (traditional grammar), Hjelmlev の言理学 (glossematics), Cook の文法素論 (tagmemics), ロンドン学派 Halliday の体系文法 (systemic grammar), 多くの研究者が長年従事した構造言語学 (structural linguistics), Gruber の語彙研究や Chomsky の統語論中心の変形生成文法 (transformational generative grammar) 等がその主たるものだが、それらはすべて (理論の精密さの程度差は別として) 「文」を対象とした文法理論の枠組みの中で語の意味分析が取り扱われている。他方、言理学 (glossematics) と構造言語学 (structural linguistics) の改良延長的な文法理論である Lamb の成層文法 (stratificational grammar) では、「多義語どうしの関係」を図で示す「意味のネットワーク」の萌芽が見られ、「語彙の概念」という観点から興味深い点がある。その一例を簡略化して次の (2) に示す。

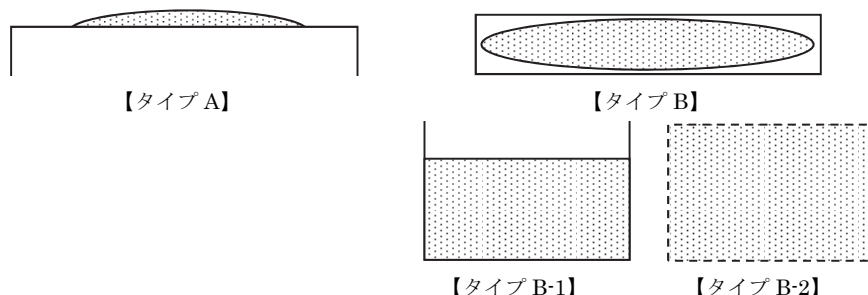


…この意味的ネットワークのアイデアは一見優れているようだが、一単語の多義性を示すだけでも図が複雑になり、この点で変形生成文法の意味素性 (semantic feature) 表示のような簡潔性がなく、結局は部分的に簡潔であるだけの説明に終わった。上記で概観した理論の流れの中で、研究者が初めて行き着いた学問が、「語彙の概念的体系」ならびに「単語どうしの意味の簡潔な関連性」の説明力を持つ認知言語学である。

—森山・高橋 (2010: 594-596) (中略筆者)

そして、実際に認知言語学の枠組みの中で dry の多義性を学術的に分析した代表的研究の一つとして、宮畑 (2006) が挙げられる。共時的な観点から中心義を設定し、辞書編纂を見据えた上で、各派生義への展開プロセスを詳細に見つめようとした重厚な論考内容は筆者も大いに参考となった。紙面の都合上、特に本稿で後述する論旨に関係する記述についてのみ、次の (2) - (6) として抜粋する。

- (2) DRY の中心義は、問題となるものが「水気がない」とであると設定できる。「ない」という状態を認識するためには「ある」という状態の認識が前提となる。この「水気がある」という意味は WET が受け持ち、スキーマ的に大きく2つのタイプが観察される。



ひとつは、物の表面に水気が付着している場合（【タイプ A】）である。典型的には、表面に水滴のような形で水気がついている状態である。そして、この水気が「ない」状態を DRY が受け持つ。

- (1) The surface of the floor is wet/dry.

もうひとつは、物が水気を含んでいるという場合（【タイプ B】）である。典型的には、物の内部に水気が内包されており、外力が加わるなどの何らかの外的作用により、その水気が内部からなくなる、という状態である。そして、この水気が「ない」状態が同じく DRY ということになる。

- (2) The kitchen towel is wet/dry.

とは言え、この区別自体が重要であるという訳ではない。例えば、(3) の場合、

- (3) The ground is wet/dry.

「水たまりがある／ない」という解釈であれば、地表の水気に関心が向けられており、「ぬかるんでいる／乾いている」と捉えるならば、地面に含まれる水気により注意が向けられているだけであって、いずれにしても、「水気のある／なし」の対立で捉えられていることには変わりがない。

- (3) 対応する日本語表現という観点で言えば、DRY は「表面に水がついて [かかって] いない」から、「(からからに) 乾いた」までを幅広くカバーすることになる。小包などにつける KEEP DRY という指示（日本語では「水気 [水濡] 厳禁」）や、

(6) To prevent infection, instruct the patient to keep his finger dry for 2 days.
 のような DRY は前者の類例で、「濡れていない」（濡らさないようにする）に対応するものである。dry fruits や dry weight などは、後者の類例で、「乾燥 (した)」が当てはまる。物の水分をなくせる限りなくした状態（からから）である。

「水気」というと、典型的には「水分」であるが、「水」に極めて近いと見なされる

体液である涙や唾液なども対象として含む。(7a)では「涙を流していない」、(7b)では、「(眼球の表面が)涙で潤っていない」の意である。

- (7) a. My eyes are dry now but still sore from the tears I have wept.
b. Damage to the tear ducts can result in dry eyes or wet eyes.

(4) 「〈水気を〉なくす」は、考え、言葉、金などの抽象的なものを対象として「〈考え・言葉・金などを〉涸らす」という比喩的な意味に展開する。「なくす」という作用の類似性に着目しているので〔機能類似〕の展開パターンに分類できる。しばしば up を伴う。

- (16) a. Sitting between the familiar four walls of your office probably dried up your ideas.
b. My words were dried up and I thought I would never write anything.
c. The declining economy dried up the state's budget surplus.

(5) 「水気がない」から、「ない」という特性を引き継いで展開する「甘み成分がない」は、使用例のバリエーションとしては少ないが、さらに比喩的に展開する意義 3 - a を生み出す要として重要な役割を果たす。この意味は、SWEET が表す「甘い」と対になる味覚のうち、SOUR, BITTER, SALTY のように第一義的に「味」の意味を担うもの以外の味覚に関して、「ない」という特性の類似性を接点に（〔特性類似〕）受け持つものである。

代表例のひとつは、「〈ビスケットが〉甘くない」(dry biscuits)で、作る際に砂糖などを入れないものを指す。実際、砂糖分を多く含んだ物はしっとり仕上がることと比較すると、砂糖分を含まないビスケットが「水分がない」と結びつくのも頷ける。

もうひとつは、「〈ワインなどが〉辛口の」(The wine is dry.)である。これは、ブドウに含まれる自然の糖分が全て発酵に利用されるまで発酵が進んだ状態のものを言う。糖分が残っている状態のワインは、sweet wine である（砂糖のような典型的な「甘み」を感じる訳ではないが、糖分が関わっている）。

(6) SWEET が「〈食べ物（の味）が〉舌に快く甘い」という味覚の意味から、「〈声・音などが〉耳に快い」や「〈物事が〉心に快い」にメタファー展開するのと同様、DRY も「快い感覚を引き起こすものがない」という意味へ比喩的に拡張する（〔特性類似〕）。

人の声に関しては、(20a-c)のように「滑らかさ [元気, 張り, 艶] がない」という意味を表す。

- (20) a. We listened to his dry and unfeeling voice.
b. When he spoke again his tone was dry and unemotional.
c. To my ears, microphones tend to distort his voice, giving it a harsh, dry sound.

また、言動や話の内容などに関して、(21a-c)のように「人間味 [情感] がない」や

「面白味 [味気] がない」という意味を表す。

- (21) a. The request sounded impeccably polite, but tinged with dry sarcasm.
 b. His speech was dull and dry.
 c. They sent us back a dry, official explanation.

このような「心地よさが無い」から、さらに「ない」が一般化すると、「〈事実などが〉飾り気がない」や「〈練習などが〉本番で使う物を使わない」など「あるものが含まれない」という意味にも広がる。

- (22) The book does not focus on dry facts and figure, but on personal accounts.
 (23) It was meant to be a dry run for a much bigger event in April.

—宮畑 (2006: 1-3, 6, 8-9)

3. 英語 dry における多義性の認知メカニズム

3.1. 原義概念と次元の論理

Lakoff and Johnson (1999: 34-37) では、主に空間関係付け (SPATIAL RELATION) に関する諸表現を実例に挙げながら、「肉体・知覚経験を通して PRIMITIVE IMAGE SCHEMAS が獲得され、その諸概念が他の事物に投射される」とする現象学的仮説が唱えられているが、そうした認知の枠組みは必然的にその他の基本語彙概念の多くにも適用され得る。ここに ONE FORM, ONE MEANING の知見を加味すると、英語 dry の多義性を捉えるには、その出発点として PRIMITIVE IMAGE SCHEMA(S) で構成される単一の中核義を精査して見つめなければならない。ただ、その過程でまずもって肝要な視座は「原義概念」に光を当てることができる史的見地である²⁾。以下 (1) がその導入意義となる。

- (1) 時に「認知言語学研究に歴史的観点は必要ない」とする声を耳にする。しかしながら、言葉は人間の社会文化・文明の発展・変化と共に発達してきたことから、そこに光を当ててすることは「如何にして外界と関り合ってきたか」という人間の思考の進化・変化の過程を明らかにすることに他ならない。したがって、現象学 (および情報学) の論拠も踏まえながら、認知言語学の本質があくまでも以下 [1] であるとするならば、極めて物理的な事象から抽出されるプリミティブな認識を多様なものに適用してきた思考様式の進化・変化の過程の一端を明らかにする上で「歴史的観点」は欠かすことができないと考えられる。…

- [1] メタファー論とカテゴリー論の二つを主幹とし、身体活動、知覚器官、さらには社会・文化環境との相互作用を通して得られた「人間の本性の産物 (products of human nature)」(cf. Lakoff and Johnson (1980: 118))

を脳内活動の結果事象である言語表現から見つめる認知科学領域研究

—森山 (2015: 196) (中略筆者)

宮畑 (2006) では共時的観点からの分析に主眼を置くアプローチを採用しているが故に見解の相違が生じるのは致し方ないものの、あくまでも上記の枠組みの中では、通常、2-(2)で示されたような異なる2種類の次元が同一のレベルで単一語の中核に据え得るかどうかが、その他の語彙概念との比較・対照の観点から考えても実現し難い³⁾。ましてや、「この区別自体が重要であるという訳ではない」とするような次元の曖昧さも原義概念には適用し難い。

そこで、次の (2) に目を向けてみよう。

(2) I. As a physical quality.

1. a. Destitute of or free from moisture; not wet or moist; arid; of the eyes, free from tears.

—OED (s.v. *dry adj.* 1a.)

OEDによると、上記が *dry* の初出時の意であり、10世紀ごろに（ドイツ語を起源として）英語にその姿を現したことが確認される。現代にもその意が引き継がれている一方、この記載からだけでは原義概念の次元を特定することができない。ところが、時は下り、種々の意味変化を経て、14世紀後半になってようやく下記 (3) の意に至ることとなる。

- (3) Said of a body of water, or of moisture *on a surface*, that has disappeared by evaporation, or by being or drained away: Dried up.

—OED (s.v. *dry adj.* 2b.) (斜体筆者)

ここで初めて二次元概念の出現に言及されている歴史的事実を鑑みる限り、*dry* の起源は本来、「三次元」概念表示物を対象にしていたと推察される。

他方、共時的見地からも観察してみよう。確かに、2-(2)で「…表面に水滴のような形で水気がついている状態である。そして、この水気が「ない」状態をDRYが受け持つ」と記されているように、現代英語でも *dry* と *surface* とのそうした意味論的結びつきに矛盾はない。以下 (4) の動詞用法における共起関係についても同様である。

- (4) The wax should not be allowed to *dry on the surface of* the floor.

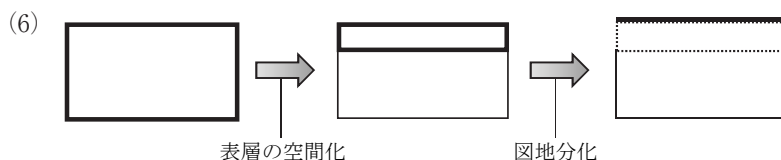
しかしながら、対象物によっては三次元空間概念表示も交えた形で *dry* と *surface* との共起関

係が具現化される場合もある。次の (5) がその実例である。

- (5) Soils of xeric sites are usually quite dry by about the first of August. Having deeper soils and possible access to the water table, normal meadow sites usually have some moisture at depth. They may, however, be fairly *dry in the surface layer*.

—Ratliff (1985: 5) (斜体筆者)

したがって、ここに前述の史的視座も加味すると、導き出される次元の論理は、まず、dry は本来「三次元空間」概念を持ち得る語句を対象としていたこと、次に、いわゆる「表層」にもスコープ (SCOPE) としてその関係を適用しつつ、図地分化 (FIGURE / GROUND SEGREGATION) の認識を通して「表面」だけを対象とするイメージ・スキーマ変換 (IMAGE-SCHEMA TRANSFORMATION) を引き起こしたこと、以上のように推定される。下記 (6) としてその現象学的変遷を図示する。



言葉を換えれば、たとえ観察者の視野には対象物の表面しか乾燥していないかのように知覚されていたとしても、それが地層などの場合はその表面下わずかな層間であっても同様の状態であることが通常である。このような知覚による分化が、表面直下層に液体物が染み込むとは認識され難い自然物、さらには（表面がコーティングされた）床面や机面などの人工開発物にも拡張され、表層ではなく表面のみの乾燥状態をも表示するように至ったと考えられる⁴⁾。

以上の論考から、dry の原義概念ならびにその派生プロセスには以下 (7) に示す理想化認知モデル (IDEALIZED COGNITIVE MODEL; ICM) の一種が要求されると捉え、論を進める。

- (7) a. 本来は「三次元空間」概念を持ち得る語句を対象とする（ただし、内部空間が概念上でも構造化され得ない、もしくは、内部への流入が想起され難いと認識される対象については、その「表面」のみが前景化する）。そして、その内部空間内に存在する液状物が蒸発（もしくは昇華）によって除去される事象を表示する⁵⁾。
- b. いわゆる「存在のメタファー (ONTOLOGICAL METAPHOR)」(cf. Lakoff and Johnson (1980: 29)) を通して、明確な物理的輪郭を持たない具象物であってもその領域化を可能とする事物には、上記 a) における「容器 - 内容物 (液状物)」の空間関係

付けが投射され、dry 事象が生じる前提認識となる。さらには、同メタファーを通して具象物であるかのように捉えられる抽象的内容物にも投射される。そして、その内容物（抽象的液状物）が除去される事象を表示する。

3.2. 「容器－内容物」の認識

3.2.1. 物理的事象への投射

2-(3) においては、「表面に水がついて [かかって] いない」ならびに「(からからに) 乾いた」の二極論から dry の意味論的分析が進められていた。確かに、そこに挙げられている “To prevent infection, instruct the patient to keep his finger dry for 2 days.” などは、内部への流入が許されない対象（「指」が物理的には液状物を吸収できる対象であるといえどもその流入を防ぐ「前提」として表面への液状物付着状態を継続してはならない対象）であるが故に合点がいく。しかしながら、3.1. で検討してきたように、そうした制限がない、すなわち、概念上「三次元空間」として捉えられる事物にもわざわざ二極論を宛がう必要はなく、原義概念の単一の見地に立脚して一貫して見つめることができるのであれば、その方が言語の経済性に適う。事実、この種の問題は「再現性」にも関る。本見地を導入することによって、たとえば 2-(3) で挙げられている dry fruits や dry weight の指示物は各々、「果肉－果汁」, 「車体－(ガソリン, オイル, 冷却水などの) 液状物」が「容器－内容物」に相当する関係で捉えられていることが容易に想像につく。他方、2-(3) では、“My eyes are dry now but still sore from the tears I have wept.”, “Damage to the tear ducts can result in dry eyes or wet eyes.” がそれぞれ、「涙を流していない」, 「(眼球の表面が) 涙で潤っていない」の意で解釈されることは記載されているものの、「涙」や「唾液」などの体液が「水」に極めて近いことへの議論に収束している。しかしながら、「再現性」を視野に入れるのであれば、ここで検討すべきは一貫して「容器－内容物」の認識にあると考えられる。つまり、「眼－涙」が存在のメタファーを通して構造化されることにより、あくまでも概念上は「容器；眼」が「内容物；涙」を個別のモノとして本来的に包含していると認識され、故にその内容物の（容器からの）除去事象が dry でもって表現されている捉えることができる⁶⁾。事実、以下 (1) のような事象表示との整合性が成り立つ点、ならびに、次の (2) も同様の概念化で捉えられる点はその証左となる⁷⁾。

(1) She said as the *tears* finally started running out of her eyes.⁸⁾

(2) Dave: *What can run all day without ever getting tired?* Do you know? I'll give you a hint. It's not your ear. And it's not your mouth.

—映画 *Dave* (1993) 〈00:47:18〉⁹⁾ (斜体筆者)

3.2.2. 抽象的事象への投射

2-(4) では、「なくす」という作用の類似性（機能類似）範疇内において「〈考え・言葉・金などを〉涸らす」という事象表示に dry が用いられる因果が議論されていた。しかしながら、「涸らす」とは記されているものの、その意義展開後として定義されている）単に「なくす」とするだけの事象は何も「考え・言葉・金」などに限られるものではなく、また、そうしたあらゆる事物の「なくす」という事象表示に dry が用いられるわけでもない。結果から言えば、ここでも 3.1-(7) の知見を適用することで、単一の観点から dry における意味概念の実像に光を当てることができる。

特に、3.1-(7b) では、「容器-内容物（液状物）」の認識が抽象的事物にも拡張される論理形態の仮説を提示した。ということは、この投射過程においては、抽象的事物であっても「内容物=液状物」の認識が生きていることがその拡張を具現化させるための必要条件となろう。逆に言えば、2-(4) で挙げられている「考え・言葉・金」などはいずれも同認識が適用される目標領域として捉えられるからこそ、dry の表現対象範疇に収まることになる。以下 (1)-(3) 各々がそうした概念化の存在を裏付ける実例となる。

- (1) Isaacman: At the heart of the First Amendment is the recognition of the fundamental importance of the *free flow of ideas*, freedom to speak one's mind is not only an aspect of an individual liberty but is essential to the quest for truth and the vitality of society as a whole, in the world of debate about public affairs many things done with motives that are less than admirable are none of the less protected by the first amendment.

—映画 *The People vs. Larry Flynt* (1996) (斜体筆者)

- (2) “Parlay voo Frongsay?” began Peter, boldly, and the next moment the crowd recoiled again, for the man with the wild eyes had left leaning against the wall, and had sprung forward and caught Peter’s hands, and begun to *pour forth a flood of words* which, though he could not understand a word of them, Peter knew the sound of.

—Nesbit (2008), Chapter V. Prisoners and Captives. (斜体筆者)

- (3) In order to comply with requirements to grant exemptions for access to *frozen funds* or other assets for basic or extraordinary expanses as set out in resolution 1452 (2002) whilst still ensuring that the asset freeze is maintained, 27 strong relationships and robust cross-government processes should be built and maintained.

—FATF (2013: 17) (斜体筆者) (アクセス：2016年11月6日)

なお、日本語においても「アイデアが湧く、考えが浮かぶ」、「流暢に話す、言い淀む」、「お金

をジャブジャブ使う、潤沢な資金を要す」など同概念化の並行性も観察され、上記(1) - (3)についてはそれぞれ、「無意識と有意識の二層構造」、「音声の連続構造」、「経済システムとしての循環構造」がそうした比喩的拡張を引き起こすトリガーとなっていると考えられる¹⁰⁾。

他方、2-(6)では、「快い感覚を引き起こすものがない」という特性類似でもって「人間味[情感]がない」や「面白味[味気]がない」とする dry の意味解釈が分析されているが、たとえば「面白味[味気]がない絵画/映画」が各々 “*dry picture”, “*dry movie” などとは通常表現されないことから明らかなように、(辞書定義の一つとしては必要な記述であるものの)包括的な再現性は満たし難い。この点においても 3-(7)の単一的視座から妥当的説明を与えることができる。たとえば、“dry sense of humor”, “dry voice” を例に挙げると、前者は humor の指示物を容器として見立て、その内容物である sense の指示物が液状物として捉えられている。後者については、“voice-emotion” 各々の指示物が「容器-内容物(液状物)」の認識で捉えられており、実際、dry と emotion との概念的結びつきは次の(4)からも確認される。

- (4) ...his *dry emotion* make him *ruthless* toward others when they seem to be enjoying life, ...
 —*The Moving Silent* (斜体・中略筆者) (アクセス: 2016年11月6日)

なお、それぞれの内容物が液状物として捉えられる認識は、“*overflowing sense of humor*”, “let one’s emotions *flow*” などと表現されることがその証左となる。

3.2.3. 味覚事象への投射

2-(5)では、「甘み成分がない」という類似性を接点に dry の味覚事象に関する分析が進められていた。確かに、dry taste は味蕾による本来的な味覚認識(つまり、甘味・塩味・酸味・苦味・うま味の五味感覚)ではなく、また、dry biscuits を「実際、砂糖分を多く含んだ物はしっとり仕上がることと比較すると、砂糖分を含まないビスケットが「水分がない」と結びつく」とするのも合点がいく。しかしながら、この派生プロセスが単に「ない」という特性類似によるものとした場合の再現性の問題点については 3.2.2. の冒頭で指摘したとおりである。さらに、その「ない」の対象を「糖分」に限定する状況の特定化を通して dry wine が検討されているものの、たとえば「砂糖なしのコーヒー」が “*dry coffee” などとは表現されず、また、そこに「発酵過程」が関係するという立場をとったとしても、“dry gin” などの非発酵物にも dry が適用されることへの簡潔な妥当的説明を与え難い(そもそも、発酵過程をも意識して飲食物の味覚表現が決定される再現性が他に観察されるかどうかの真偽も定かではない)。ましてや、「糖分」だけが特定化されなければならない必然的理由は何かというミッシング・リンクも存在している。このような中、上述の dry biscuits と dry wine の両意味解釈における各プロセス

をあくまでも「単一」の観点から捉えるのであれば、一貫して、2-(7)の知見が有用となる¹¹⁾。

まず、前者の dry biscuits について、2-(5)では、「ない」という特性の類似性を接点」とする、とされている。しかしながら、2-(7)の観点から言えば、「ない」という特性をわざわざ設けて新しい概念化を宛がおうとする必要はなく、厳密には「ビスケットー（しっとりとし上げる）糖分」がそれぞれ「容器－内容物（液状物）」を前提とした認識で捉えられているに過ぎない。

その一方で、dry wine はワイン自体がすでに液状物であり、「(内容物が) しっとり」などと対比して説明されていた dry biscuits とはそもそもの構造が異なる。さらに、2-(5)における「この意味は、SWEET が表す「甘い」と対になる味覚のうち、SOUR, BITTER, SALTY のように第一義的に「味」の意味を担うもの以外の味覚」とする指摘は正しく射ているものの、これは dry が本来的な味覚認識ではなく、たとえワインの分類上はそうであっても言語認識上は sweet taste などと同列に位置付けることができないことを意味する。となると、dry wine は「糖分がある；甘い⇔糖分がない；甘くない」の対立ではなく、いわゆる五味感覚の範疇外で捉える必要が生じるが、ここに存在のメタファーを適用するのであれば、dry 事象が生起するための前提条件となる『「容器－内容物」の具体的認識とは何か』が論点となる。

ここで、その解決策への手がかりとなりそうなのが、以下(1)のような実例である。

- (1) *Dry beer is refreshing and with typically clear taste without any specific and lingering aftertaste.*

—*Rate Beer* (斜体筆者) (アクセス：2016年11月6日)

ここから得られる関連概念として、dry beer は「(他の味を除去して) すっきりさせる；後味を残さない」といった感覚を与える、という特性を持つことが挙げられる。実際、次の(2)に示されるように、日本酒のいわゆる「辛口」にも同様の概念表示が観察される。

- (2) *This SAKE makes you refresh with a dry and clear taste!*

—*Sake* (斜体筆者) (アクセス：2016年11月6日)

したがって、ここでの dry 事象が生じる前提の対象内容物とは、

- (3) a. 行為者の口という容器内に残存している「他の味」もしくは「後味」
b. ワインそれ自体が行為者の口という容器内に与える「後味」

のどちらかとなるだろうが、結局のところ、いずれの場合であっても「容器；口－内容物；他の味／後味」の認識が共通して存在している概念化に行き着く。ただ、ここで問題となるのは、そのような対象内容物が「液状物の認識で捉えられるものであるかどうか」という、これまで論じてきた趣旨との一貫性についてである¹²⁾。そこで、次に、下記(4)における“aftertastes”の定義に目を転じたい。

- (4) a taste that *stays* in your mouth after you have eaten or drunk something
—LDCE (s.v. aftertastes) (斜体筆者)

上記(4)では“stay”を用いて定義されているものの、何らかの味が舌の上に stay するには現象学の観点から見ても（程度の差こそあれども）「粘着性」が必要とされる。実際、以下(5)のような実例が存在するのも、この認識の存在を物語っている。

- (5) On flavor, the beer has a touch of bread and hops followed by a horrible icky *aftertaste*.
The AT is a little *sticky on my tongue* (nullus).
—*The Beer Brotha* (斜体筆者) (アクセス：2016年11月6日)

そして、この性質は、その保有物の全体であれ部分であれ、広義の上での「液状」形態でなければならない。ここに dry が用いられるための「容器；口－内容物；液状物による他の味／後味」の認識の存在が確認され、同時に、そうした粘着性を持つものの多くが「糖分由来」にあるとしてあくまでも結果的に sweet と対照されるようになったと考えられる¹³⁾。事実、dry wine, dry beer は各々、飲酒後、(含有量の糖度が主たる要因ではなく)フェノール化合物であるタンニン／やや高めアルコール度によって、いずれも「口の中(の内容物)を乾燥させる；除去する」感覚を引き起こす¹⁴⁾。繰り返しとなるが、言語認識上、ここに「糖分がある；甘い ⇔ 糖分がない；甘くない」の対立が直接的に関与する概念的余地は存在していない。

なお、2-(6)では、“The book does not focus on dry facts and figure, but on personal accounts.”における dry の意味用法が、味覚認識から派生した展開項目の中で議論され、「心地よさが無い → 『ない』の一般化 → 〈事実などが〉飾り気がない」という趣旨で分析されていたが、ただ単に「ない」というあらゆる事象に対して dry が適用可能であるというわけではないことも既に述べた。恐らく、こうした見解は日本語の「無味乾燥」からの類推に基づいているのかもしれないが、通時的には次の(6)に続く形で本義の(7)が現れていること、また、共時的には下記(8)のように表現されることなど、通時的・共時的言語事実から、ここでの dry も一貫して「容器 (fact) - 内容物 (emotion や thought などの主観)」の認識を前提としていることが確認される。「感情」や「考え」が「液状物」で捉えられることは、3.2.2.で既に論考

したとおりである¹⁵⁾。

- (6) “Feeling or showing no emotion, impassive; destitute of tender feeling ; wanting in sympathy or cordiality; stiff, hard, cold,” “Said of a jest or sarcasm uttered in a matter-of-fact tone and without show of pleasantry, or of humour that has the air of being unconscious or unintentional; also of a person given to such humour; caustically witty; in early use, ironical”

—*OED* (s.v. *dry adj.* 13-14)

- (7) “Lacking adornment or embellishment, or some addition; meagre, plain bare; matter-of-fact”

—*OED* (s.v. *dry adj.* 15)

- (8) The exclusion of members of the black race in the Jury when a black accused is being tried is done in order that the accused will receive excessive punishment if found guilty, or to *inject racial prejudice into the fact finding process* of the jury.

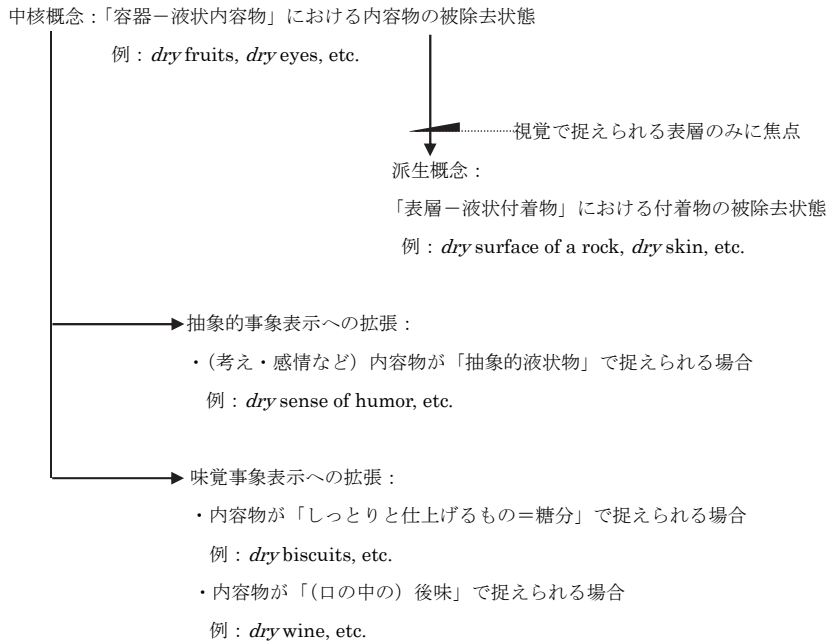
—*Ford v. Georgia* by Cornell University Law School (斜体筆者)

(アクセス：2016年11月7日)

3.2.4. 教材提示としての一案

これまでの論考内容を基に、dryの多義性を単一的観点から簡素に表したものを以下(1)に示す。

(1) dryの多義性



4. おわりに

本稿では、“dry”の意味論的解釈を論題に、共時的かつ通時的な空間的アプローチを通して、多義性に対する捉え方の在り方を模索した。もちろん、複雑な派生展開を要する語句も存在しているが、あくまでも人間にとっての自然な経験の相に沿った形でその分化数を抑えた妥当的説明をそこに与えることができるのであれば、学習者にとって理解をより深めやすい語彙学習指導を実現する手助けとなるに違いない。そうした教育的意味では、多義を生みやすい基本語彙であればあるほど、でき得る限り「単一の前義概念」を通した中核義の存在を精査して見つけ、かつ、そこから得られる派生プロセスについて「反証可能性」を踏まえた上で他の関連表現との「整合性」ならびに「再現性」にも慎重を期した取り組みが不可欠となる。

注

- 1) たとえば、京都外国語専門学校1-2年生69名を対象(2016年11月8日実施)に、以下[1]の映画シーンを利用して英語基本語句群を含む「多義性」への理解度を確かめようとしたところ、その解答に至った被験者は2名のみであった。

[1] Orphne: You can run, but cannot walk. You have a mouth, but cannot talk. You have a head, but never weep. You have a bed, but never sleep. Ask yourself, who are you?

—映画 *Star Wars: Clone Wars*, season 4, Episode: Mercy Mission (2011) <00:39:11>

上記は二体の droids が地底に迷い込み、地上への戻り方を尋ねたことに対してヒント(なぞかけ)が与えられたシーンである。常套の内容とはいえども、映像によって視覚を刺激し、前後のプロットも踏まえさせることで学習者の関心を集める狙いもあった。確かに、なぞかけという特性上、多義性への純粋な理解度だけを因るには不向きな点は織り込み済みであったものの、想定外であったのは解説後における学習者の反応である。その多くが run を除く他の語群となぞかけの答えとなる語との共起関係にまで理解が及んでいなかったことが確認され、基本語彙であってもその多義性の教示には注意を要すると自省したことも本稿作成に着手するきっかけとなった。なお、当該調査中、「(耳から出血して)血が耳の中で固まった」を英訳にする課題も与えたが、本論で後述する dry を用いて回答できた被験者は皆無であった。この結果も、多義語の運用力育成に関する問題の一端を示しているように感じてならない。

- 2) 原義概念から抽出されるスキーマのすべてが多義性を生むための(現代英語期における)中核義に必ず相当すると述べているわけではない。実際、たとえば英語前置詞 with のように、原義概念と中核義とが異なる事例は少ないながらも存在する(cf. 森山・入学他(2010: 192-209))。しかしながら、たとえそのような場合であったとしても、論考の出発点として原義概念に光を当てること、ひいては、原義概念から如何なるプロセスを経て変化が引き起こされているのかを見つめることが、あくまでも言語事実に沿った中核義の精査に至り得ると考え、論を進める。
- 3) 確かに、スペイン語 en などはその単一の形態にいわゆる英語 on, in 各々に相当する2つの異なる次元概念が内包されている。しかしながら、意味論上、それら2つは対等に位置づけられているとは考え難く、少なくとも「この区別自体が重要であるという訳ではない」とする類いのものではない。事実、たとえば“un gusano *en* la mesa”といった句表現単独では英語で言う“a worm *on* the table,” “a worm *in* the table”のいずれの事象表示に相当するかが不明である一方、“*en* el edificio”と表現されるときは通常、“in the station”と解釈される。つまり、“stand on (top of) the building”などと表現したいとき、スペイン語では“estar de pie *sobre* el edificio”これまでとは異なる様相を呈することから、スペイン語 en の中核概念は英語 in のそれに相当し、on の概念は与格名詞句の指示物特性、ひいては、その句表現が用いられる文全体(またはその前後の文脈)の解釈によって発生していると考えられる。それでは、中核たる「三次元」概念が如何なるイメージ・スキーマ変換のプロセスを通して「二次元/一次元」概念に変化するかが議論となろうが、紙面の都合上、別稿にて論考したい。なお、同様のことは何も前置詞概念に留まらず、たとえば、いわゆる「のびる;のばす」、「広がる;広げる」各々に相当する2つの異なる次元概念を有している英語 extend のような事例であっても、原義概念の段階では「単一次元の保有」であり、同列に据えられていないことに変わりはない。詳しくは上野・森山 他(2006: 392) 参照。
- 4) 一見、二次元構成物のように感じられても認識上は三次元空間の概念化が可能であるものについてはここに含まれない。たとえば、dry clothes や hair drier などがそれに当たる。「衣服」、「(一本の)髪の毛」は各々、視覚上の形態の観点からは二次元/一次元構成物と見なしつつも、「服/髪に染み込む」などと表現されるように、「容器-内容物」としての概念化も可能である。実際、両者を乾燥させるような日常経験を振り返っても、各々、(厳密な意味での)表面だけをその対象とするわけではない。
- 5) Dry が運用される背後に「容器-内容物」の認識が存在していることは、以下[1]に示されるように、「所有者-所有物」の概念表示形態に変換し得る事実からも支持される。

[1] *dry air* ≡ *air which is not moisture* ≡ *air which does not have moisture*

加えて、ルーマニア語 “*a înghiți în sec*” (英語直訳: *to swallow in dry*) といった表現とも概念的に並行する。この表現は美味しそうなのなどを見たときに「唾をゴクリとのむ」事象を表示しているが、一見、「乾燥」事象とは無関係のように感じられるかもしれない。しかしながら、ルーマニア語母語話者である Oana MORIYAMA 氏を通じて Romania-Japan Association of Education and Science (同氏は本協会の International Coordinator) に調査を依頼したところ、「この表現は、通常、『美味しそうなのなどを目の前にしてよだれをすべて垂れ流し、口の中が乾ききった状態で最後の一滴の唾液をのみこむ』とルーマニア語母語話者は考えて用いられる」という趣旨の回答が得られた。つまり、「容器: 口-内容物: 唾液」という視座から構造化されており、異言語間にまたがって「容器性」の再現性が確認されるという点でも本論考の妥当性を物語っている。

- 6) 「個別のモノ」と記したのは、眼が本来的に含んでいる体液成分とは異なるものとして「涙」が捉えられている概念上の区分を行っていることによる。これは、言葉を換えれば、涙は眼と「分離可能」な(眼の)「所有物」にも相当する。以下 [1] がその概念化を示す事例となる。

[1] Germont: As long as *my eyes have tears*, so long shall I weep for you.

—オペラ *La Traviata* (1988), Act 3 (斜体筆者) (アクセス: 2016年11月7日)
また、「容器: 眼-内容物: 涙」とする認識は、次の [2] - [4] から支持される。

[2] Porthos: I just said you're praying. Are you deaf, too? I know you're blind, because if you'd seen the tits that just walked out of here, you'd *have tears in your eyes*.

—映画 *The Man in the Iron Mask* (1998) (00:03:17) (斜体筆者)

[3] Morgan: Maybe if I don't blink, my eyes will *tear up*.

—TV ドラマ *Dexter* (2006), Season 1, Episode: Love American Style (斜体筆者)

[4] (Tomorrow) You will love again (Tomorrow) *Your tear-filled eyes will dry*

—Jay and Americans (2004) (斜体筆者)

そして、本論 3.1 - (6) の知覚認識を通じた場合に、「空間-表面」の図地分化が生じることとなる。一方、対象範囲を眼窩にまで拡大して解釈すると、以上の「容器-内容物」の関係が逆転する。下記 [5] がその事例である。

[5] Mutt: ...the golden vision reappears! Through eyes... through *eyes in tears!* We gotta go through that waterfall!

—映画 *Indiana Jones and the Kingdom of the Crystal Skull* (2008) (01:31:07) (斜体筆者)
なお、“dry eye”でもってメトニミカルな運用がなされた珍しい事例として以下 [6] を挙げておく。

[6] Knucksy: When he was buried, there wasn't a *dry eye* in the cellblock.

—映画 *Bedtime for Bonzo* (1951) (斜体筆者)

- 7) 「容器-内容物」の認識を通じた両者のさらなる論考について詳しくは上野 (2012: 154-163), 上野 (2013: 133-139) 参照。
- 8) 以下 [1] のように表現された場合、tears の指示物の「出発点」として、すなわち「零次元化構成物」として her eyes の指示物が捉えられる別の概念化が行われている。
- [1] She said as the *tears* finally started running *from* her eyes.
- 9) 〈 〉内の数字はそれぞれ、その台詞が当該映画 DVD 内で生起する〈時間・分・秒〉を表す。なお、生起時間不明の場合、TV ドラマの場合は生起タイムを記載しない。他同様。
- 10) 紙面の都合上、それらの内的構造についてのさらなる論考は稿を改めたい。なお、言葉を「容器-内容物」に見立てる概念化には「導管メタファー (CONDUIT METAPHOR)」が関与している。詳しくは Lakoff and Johnson (1980: 10-11) 参照。また、「無意識-有意識」の概念化について詳しくは Moriyama (2017) 参照。
- 11) *OED* (s.v. *dry*, *adj.* 8) でも、本義については “Of wines, etc.: Free from sweetness and fruity flavour” として記述されているものの、それはあくまでも辞書特性としての定義分類上のことであり、意味変化のプロセスを記したものではない。事実、その直前の項には “Solid, not liquid.” (*OED* (s.v. *dry*, *adj.* 7)) と記述されており、やはり「液状物」を前提とした派生プロセスによって生じていることが伺え

る。ただ、ここで興味深い点は、“Of wines, etc.”とする記述が“Solid, not liquid.”のそれに続く史的流れの中で突発的に現れている（かのように感じられる）ことである。ここからは憶測の域を出ないが、当時、口の中に残存する他の味／後味を乾燥（除去）させる（もしくはその飲料自体が後味を残さない）かのように知覚させる代表的な飲料が dry wine であった一方、dry wine との対照的な味わいを（多分に糖分による粘着質／果実風味の強さによる後味によって）sweet wine / fruity wine が持つと捉えたが故に、OED では以上の定義がなされている可能性がある。しかしながら、時の経過に伴って新しい dry taste の非果実由来飲料（dry beer, dry gin など）が開発され、dry wine から抽出された「容器；口－内容物；他の味／後味」の認識がその領域を超え、順次、それらに適用されてきたと想定される。事実、近年も、たばこの味わいを「ドライ」と称する製品など数多く現れている。そうした諸事物との整合性を見つめる上で、もし「共時的」観点をあくまでも優先するのであれば、なおさら「容器；口－内容物；他の味／後味」を前提認識とするような最大公約数的捉え方の導入が求められると考えられる。

- 12) 便宜上、「(口の中に残っている)「他の味」もしくは「後味」としたが、もちろん dry wine などは食後に飲む用途を持つものとして限定され得ない。ただ、飲酒前に何も食べていなくとも dry wine などを飲むことによって「すっきりとした感覚 (clearness, refreshment)」が引き起こされるのであれば、その前提として「すっきりとしない感覚」が口の中に残っていることになり、この感覚も含めて「他の味／後味」とした。他方、dry wine などそれ自体が「口の中に(粘着物による)後味を残さない」という特性を持つとも考えられるが、本論で詳述しているように、その場合であっても「容器；口－内容物；液状物による後味」の認識が一貫して存在していることは言を俟たない。
- 13) なお、“eaten on its own without any butter, jam, etc.” (OALD (s.v. dry, adj. 5)) と定義される dry bread などは、本論 3. 1－(6) の図地分化にこの粘着物質概念を加味した形で捉えられる。
- 14) 本旨は生理学の観点とも並行する。詳しくは『抗酸化機能分析研究センター』(国立大学法人 旭川医科大学) (アクセス：2016年11月10日) 参照。
- 15) 他方、本論 2－(6) で挙げられている “It was meant to be a dry run for a much bigger event in April.” については、「存在のメタファー」を通じた「活動」の容器化 (Lakoff and Johnson (1980: 31)) ならびに「川の流れ」を根源領域とした「事象の流れ」の構造化を交えたうえで、run の概念が「容器－内容物」の認識範疇で捉えられ得る分析を要する。詳しくは上野 (2012: 141-154) 参照。なお、「無味乾燥」の意を宛がおうとしても “*dry picture / film” など (物理的な乾燥事象を表示する以外に) 表現されないのは、picture / film の両指示物には程度の差こそあれ、本来的に作成者の主観が融合していることによると考えられる。つまり、そうした主観物を除去することは通常不可能であり、fact の指示物とはそもそもの質が異なる。

Bibliography

- ※ Film DVDs と TV Drama について、邦題が存在する場合にのみそれらを記すこととする。
- Anno, N. (2014) “A Cognitive Linguistic Approach to ESP Education: in the Case of English Business Terms,” in Constantinescu, M. et. al., *Omul și Societatea*, Vol. 6, 115-122. Râmnicu Vâlcea: Argedava Cultural Association; Casa Artelor Poligrafice Editoriale Rotarexim.
- Beitel, D. A., R. W. Gibbs and P. Sanders (2001) “The Embodied Approach to the Polysemy of the Spatial Preposition *on*,” in Cuyckens, H. and B. Zawada (eds.) *Polysemy in Cognitive Linguistics*, 241-260. JJAmsterdam / Philadelphia: John Benjamins.
- Bolinger, D. (1977) *Meaning and Form*. New York: Longman.
- Chomsky, N. (1965) *Aspects of the Theory of Syntax*. Special Technical Report, Massachusetts Institute of Technology. Research Laboratory of Electronics, No. 11. Cambridge: M.I.T. Press.
- Cook, W.A. (1969) *Introduction to Tagmemic Analysis*. (Transatlantic series in linguistics) New York: Holt, Rinehart and Winston.
- Curme, G. O. (1931) *Syntax*. New York: Heath.

- Fillmore, C. J. (1968) "The Case for Case." in Bach, E. and Ro.T. Harms, (eds.) *Universals in Linguistic Theory*. 1-88. New York: Holt, Rinehart and Winston.
- Grice, H. (1989). *Studies in the Way of Words*. Cambridge: Harvard University Press.
- Gruber, J. S. (1976) *Lexical Structures in Syntax and Semantics*. Amsterdam: North Holl.
- Halliday, M. A. K. (1977) *The Linguistic Sciences and Language Teaching*. (Longman Linguistic Library). New York: Longman.
- Hjelmslev, L. (1969) *Prolegomena to a Theory of Language*. Madison: University of Wisconsin Press.
- Jespersen, O. (1984) *Analytic Syntax*. Chicago: University of Chicago Press.
- Kruisinga, E. (1931) *A Handbook of Present-Day English*, Vol. 4. P. Groningen: Noordhoff.
- Lakoff, G. and M. Johnson (1980) *Metaphors We Live By*. Chicago: University of Chicago Press.
- Lakoff, G. and M. Johnson (1999) *Philosophy in the Flesh: The Embodiment Mind and its Challenge to Western Thought*. New York: Basic Books.
- Lamb, S.M. (1966) *Outline of Stratificational Grammar*. Washington D.C: Georgetown University Press.
- Langacker, R. W. (1991) *Concept, Image, and Symbol: The Cognitive Basis of Grammar*. New York: Mouton de Gruyter.
- Levi, J. (1986) "Applications of Linguistics to the Language of Legal Interactions." in Peter, C. and V. Raskin. (eds.) *The Real-World Linguist: Linguistic Applications in the 1980s*, 230-265. Norwood: Albex.
- Lindstromberg, S. (1997) *English Prepositions Explained*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Moriyama, O. (2006) *Influența Mass-mediei asupra Comportamentului Adolescentului*. Brașov: Universitatea Transilvania: Facultatea de Psihologie și Științe ale Educației.
- Nesbit, E. (2008) *The Railway Children*. London: Oxford University Press.
- Poutsma, H. (1928) *A Grammar of Late Modern English*, Part I. 2nd ed. Groningen: P. Noordhoff.
- 池上嘉彦 (1975) 『意味論 - 意味構造の分析と記述 -』. 大修館書店: 東京.
- 上野義和 (2012) 「英語動詞 RUN の研究 (その9)」 *SELL* 第29号, pp. 141-166. 京都外国語大学英米語学科研究会.
- 上野義和 (2012) 「英語動詞 RUN の研究 (その10)」 *SELL* 第30号, pp. 133-157. 京都外国語大学英米語学科研究会.
- 上野義和・森山智浩 (2012) 「異言語教育と言語文化 (その4) - メタファー研究の再考と言語文化教育の展開 -」 『京都外国語大学研究論叢』 第79号, pp.1-21. 京都外国語大学国際言語平和研究所.
- 上野義和・森山智浩・入学直哉 他 (2002) 『認知意味論の諸相 - 身体性と空間の認識 -』. 松柏社: 東京.
- 上野義和・森山智浩 他 (2006) 『英語教師のための効果的語彙指導法 - 認知言語学的アプローチ -』. 英宝社: 東京.
- 中村明徳 (2004) 「高等教育の充実に向けて - いかに魅力ある授業を創り出すか -」 『南大阪大学紀要』 第6巻 (通号23号) 太成学院大学.
- 宮畑一範 (2006) 「DRYの多義に関する一考察」 『言語文化学研究』 (言語情報編) 第1号, pp. 1-12. 大阪府立大学.
- 森山智浩 (2015) 「[Enter into NP] の概念研究 - 認知言語学的アプローチ -」 『近畿大学 法学』 第62巻 第3・4号, pp. 187-245. 近畿大学法学会.
- 森山智浩・高橋紀穂 (2010) 「レイコフとバタイユの視座における「自殺と反道徳性」の研究 - 法言語学と法社会学による学際的アプローチ -」 『近畿大学 法学』 第58巻第2・3号 (通巻159号) (近畿大学法学部創立60周年記念号), pp.585-678. 近畿大学法学会.
- 森山智浩・入学直哉 他 (2010) 『英語前置詞の概念 - 認知言語学・教育学・社会学・心理学・言語文化学の学際的観点から -』 (FD 語学教育改革シリーズ1). ブイツーソリューション: 愛知.
- 森山智浩・小山政史 他 (2012) 『Let's Vocabucize 1000! - イメージと映画で学ぶ英単語総合演習帳 -』. 松柏社: 東京.
- 李炫淨 (2009) 『知覚認識のメカニズムと言語教育への応用研究 - 共感覚と投影活動を中心に -』. 博士論

文. 京都外国語大学.

【Dictionaries】

[LDCE] Quirk, R. (ed.) (1987) *Longman Dictionary of Contemporary English*. London: Longman.

[OALD] Hornby, A. S. (ed.) (1995) *Oxford Advanced Learner's Dictionary*. London: Oxford University Press.

[OED] Burchfield, R.W. (ed.) (1978) *The Oxford English Dictionary*. Oxford: Clarendon Press.

瀬戸賢一 他 (編) (2007) 『英語多義ネットワーク辞典』. 小学館. 東京.

寺澤芳雄 (編) (1999) 『英語語源辞典』. 研究社: 東京.

政村秀實 (2002) 『英語語義イメージ辞典』. 大修館書店: 東京.

【Film DVDs】

Bedtime for Bonzo (1951). Universal International Pictures.

Dave (邦題: 『デーヴ』) (1993). Warner Brothers.

Indiana Jones and the Kingdom of the Crystal Skull (2008) (邦題: 『インディ・ジョーンズ/クリスタル・スカルの王国』). Paramount Pictures.

Man in the Iron Mask, The (1998) (邦題: 『仮面の男』). United Artists.

People vs. Larry Flynt, The (1996) (邦題: 『ラリーフリント』). Columbia Pictures.

Silver Bullet (1985) (邦題: 『シルバース・ブリット/死霊の牙』). Dino De Laurentiis.

Star Wars: Clone Wars, season 4, Episode: Mercy Mission (2011) (邦題: 『スター・ウォーズ: クローン・ウォーズ』). Lucasfilm Animation.

【TV Drama】

Dexter (2006) (邦題: 『デクスター ~警察官は殺人鬼』), Season 1, Episode: Love American Style. Showtime Networks.

【Websites】

Beer Brotha, The

URL: <http://thebeerbrotha.blogspot.jp/2009/06/alka-seltzer-beer.html>

FATF (2013) *International Best Practices: Targeted Financial Sanctions Related to Terrorism and Terrorist Financing* (Recommendation 6). Paris: FATF.

URL: <http://www.fatf-gafi.org/media/fatf/documents/recommendations/BPP-Fin-Sanctions-TF-R6.pdf>

Ford v. Georgia by Cornell University Law School

URL: <https://www.law.cornell.edu/supremecourt/text/498/411>

La Traviata

URL: http://www.murashev.com/opera/La_traviata_libretto_English_Act_3

Moving Silent, The

URL: <https://themovingsilent.wordpress.com/2014/10/21/favorite-horror-films/>

Rate Beer

URL: <http://www.ratebeer.com/beer/cesu-dry/74756/>

Ratliff, R. (1985) *Meadows in the Sierra Nevada of California: State of Knowledge*. Berkeley: Pacific Southwest Forest and Range Experiment Station.

URL: <http://www.sierraforestlegacy.org/Resources/Conservation/FireForestEcology/ThreatenedHabitats/MontaneMeadows/Montane-Ratliff85.pdf>

Sake

URL: http://www.japansake.or.jp/sake/pdf/list_sake.pdf

国立大学法人 旭川医科大学 『抗酸化機能分析研究センター』 44

URL: <http://food-db.asahikawa-med.ac.jp/index.php?action=docu&id=26>

【Song Lyrics】

Jay and the Americans (2004) "Tomorrow," in the album of *Come a Little Bit Closer*. EMI Catalog.

A Cognitive Approach to the Polysemic Mechanism of DRY

Naoto ANNO

Abstract

This paper deals with the Polysemic Mechanism of DRY through synchronic and diachronic viewpoints. First, it discusses the significances of introducing a cognitive approach into understanding the polysemy of English words. Then, it points out the several problems concerning the previous research of Polysemy of DRY. Finally, it introduces how to better understand the polysemic mechanism based on ICM (IDEALIZED COGNITIVE MODEL).

Keywords: *cognitive linguistics, polysemy, language cultures, foreign language studies, ICM*

